
僕の後ろはいつも雨。

お春

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の後ろはいつも雨。

【Nコード】

N1846BA

【作者名】

お春

【あらすじ】

5月2日。

僕は、初めて人を殺した。

人を殺す“僕”の話です。

1（前書き）

とある少年の話です（＾＾）

ゆっくり投稿していると思っています。

ある有名な作家さんに感化されて書いた物なので似通った所もある
かもしれませんが、

ご了承下さい…。

では、

どうぞお楽しみください（＾＾）

僕の持論。

人は皆、裏を隠して生きている。

コツ、コツ、コツ…。

「やめて、こないでっ」

コツ、コツ…。

「誰か…誰かたすけて」

コツ…。

「いやああああああっ!!!!!!!!!!!!!!」

5月2日。

僕は、初めて人を殺した。

苦しみ悶える男。

「うううっ……。ああっ」

それを見下ろす僕。

「やめろ……。やめろおおおお！！！」

パク。

その音は、おおよその状況に似つかわしくない程平和。

「うん、おいしい」

「ああ……。！！限定10個のウルトラメロンがああ……。」

男は起き上がって僕の持つメロンパンに手を伸ばしてきた。

僕はそれをすかさず払いのける。

容赦はない。

こいつに容赦は不要だから。

男はまた身をよじり悶え出すが、気にしない。

気にしたら負けだ。

なにより、これは僕が購買で買ってきた昼ご飯。

渡すわけにはいかない。

「あー、おいしかった」

ごちそうさま、と言うと僕はメロンパンのはいつていた袋を細く折りたたみ結び目を作る。

こういうのは、結構ちゃんとしないとだめな方なのだ。

「早っ！！せめて一口くらいくれよ！！」

男が急にわがママを言い出す。

「…はい」

哀れなコイツに、僕はせめてもの救いを与える。

男は一瞬で目に光を取り戻し、僕の手から自分に渡ってきた物を見
てすぐにそれを困惑へと変えた。

「これは…」

「ウルトラメロン、のゴミ」

つまり捨ててこいって事。

早くいけ、と僕は顎で指示する。

「ひどすぎるっ！！！！」

そう言いつつもゴミ箱に直行するのが、僕の友達の青木 孝弘。

いい奴だけど、いつもうるさい。

「誠司の馬鹿！！もう知らねえ！！」

「あっそ」

そして、僕が成澤 誠司。

ごく普通の高校2年生。

一人称が僕なのは幼稚園からの名残。

そう、僕は普通だ。

女は必死に壁にすがりついていた。

まるでそれを神だというように、強く、強く。

…いや、実際は違うだろう。

どうしてここに壁があるの。

どうして私はここに來たの。
どうして私は泣いているの。
どうして。

ともかく、壁は彼女にとって憎んでも憎みきれない存在だったはずだ。

「やめて、こないでっ」

女がこつちを見て震えていたのを、今でも覚えている。
履いている靴がコンクリートに当たって2回音を鳴らした。

「誰か：誰かたすけて」

本当はきつと綺麗なはずの女の顔が恐怖で歪む。

その顔がもつと近くで見たくて、また一步を踏み出す。

女との距離は0に等しかった。

それでも髪の毛が邪魔で顔がよく見えないため、黒い手袋をした手で優しく髪をかきあげる。

…綺麗だった。

近くでみるそれは理想どうりの顔つき。

圧倒的に恐怖が支配して、見開かれる目。

何か言いたげに細かく動く口は、小さい吐息を漏らしていた。

これに真つ赤な血が流れれば、最高の作品になる。

そう考えていたときには、もうすでに実行に移していた。

高らかに得物を振り上げ、女に突き立てる。

ザクリ、という血肉が弾ける音。

血が吹き出て、女の顔に飛び散る。

どんな化粧よりも、血でまみれた女は美しかった。

「いやああああああっ！！！！！！！！！！」

女がまたまた理想どうりの悲鳴をあげる。

それがとても嬉しくて、僕は得物をまた振り上げた。

どうして殺されなくちゃいけないの？

…さあね。

僕はクラスでも目立つ方だ。

成績もいいし、運動もできる。

自分で言うのもなんだけど、女の子受けもいい。

毎日いろんな人に囲まれて、楽しい。

のに。

僕は人を殺す。

なぜだかはわからない。

あの恐怖に怯える顔を見ると、残虐な僕の心がざわめき出すのだ。

「誠司？」

孝弘の声が頭に響く。

何を言っているかはわからない。

そういえば、あの女性もあわあわと口をうごかしていたが、なんと言っていたのだろう。

聞いておけば良かった。

それが少しでも罪滅ぼしになるのなら。

「誠司！！」

「…え??」

孝弘は呆れたようにため息をついた。

え、訳がわかんないんだけど。
なんでため息ついてるの??

「移動教室行くなって言ってるじゃん。人の話を聞けよあ」

「ああ、ごめん」

そう言えば教室には誰もいない。

次は確か生物だったつけ。

「ほら、行くぞ」

机をがさごそと漁る僕に、孝弘はせかす。

「あー、ない。先行ってて」

「まじかよ!!」

孝弘はくるりときびすを返して僕から遠ざかっていく。

早…。

僕は啞然とした。

僕を待つという考えは初めから持ち合わせていないらしい。

まあ、まじめだからしょうがない。

僕は孝弘を諦めて、生物のノート探しに専念することにする。

「なんでないわけ？」

机は結構綺麗にしている方だ。

でも、全く見当たらない。

授業は別にゆつくり行けばいいけど、ないと後々面倒だからなあ。

「あれ、成澤じゃん」

「…ん？」

見てみれば、後ろには活発そうな女子がいた。

宮川 夏美。

クラスでも僕と同じくらい目立つ、女子のボスみたいな奴。

「何してんの?? 授業始まってるよね??」

「ノート探してんの。宮川は??」

ノート??

と宮川が復唱する。

「ノートなら、前の授業で集めたじゃん」

…は??

そうだったけ。

「ほんと??」

「うん。…ぷふっ。成澤バカだあ」

宮川が笑いをこらえられずに吹き出す。

「うるさいなあ。ああ、もう僕行くよ」

「お疲れ様ー」

きやはは、と宮川の笑い声が響く。

授業出ないんだ。

あいつ後で怒られるぞ。

そんな事を考えながら、僕は授業へとゆっくりと歩き出した。

2 (前書き)

読みにくくてすみません… (´>|<`)

僕が初めて人を殺すことに興味を持ったのは、小学4年生の時。それまでは、それはいけない事だとしつかりと認識していたはずなのに。

あれは、調理実習の時だった。

野菜に苦戦していた僕は誤って、隣にいた女の子の指を包丁で切ってしまった。

ザクリ、という物が気持ちよく切れた音。

それは僕の思考を完全に止めてしまった。

途端に、耐え難いほどの悲鳴が教室を包み込む。

ころりと転がる指に、クラス中がざわめく。

指が、指が…。

と泣き叫ぶ女の子の隣で、僕はただただ放心していた。

そのうち身体中が震えだして、立つことすらできなくなった。

持ち主を失った人差し指の先端が、座り込んだ僕をそつと恐怖へと招く。

僕は右手に視線をうつす。

鋭く光る血まみれの包丁が、僕の手握られていた。

コンビニに行く、と告げる。

「行つてらっしゃい」

母が特に気にすることもなく、僕を夜の世界へ出ることを許した。冷えた夜の空気は、切り裂くようにして僕の顔を通り過ぎていく。

殺したい。

ふと思いついたその考えは、むくむくと大きくなって僕を飲み込む。この思いを抱くのは何度目だろう。

空を見上げれば、金色に輝く月。

月は人に狂気を与える、とは誰が言ったか。

誰か、僕を満たさせて。

ポケットから取り出したナイフは、月の光を吸って冷たく輝く。

殺そう。

このナイフに存在意義を与えて。

僕の負の欲望を全てぶつけて。

僕はゆつくりと夜の闇へときえた。

あの時、僕は担任の先生に事情聴取まがいのことをされた。

薄暗い教室で、机を向かい合わせにして2人座る。

窓のむこうからは校庭で遊ぶ甲高い子供の声。

「どうしてこうなったのか、教えてくれる??」

ぼっちゃりとした女の先生は、僕を咎めるでもなく優しく聞いてき

た。

「急に、手を出してきたんだ。その切り方は危ないよって。それでそれで……」

指が転がった。

まな板の上に、小さな指が。

「……そうね、あなたは悪くないわ。誰も悪くないの」
ぽろぽろと涙を落とす僕を見て、先生は僕を抱きしめる。

ごめんなさい。

人を傷つけてしまって。

ぺろりと舌なめずりをする、乾いた唇が一時的に潤う。

僕の目は、1人の男に釘付けになっていた。

ホームレスであろうその男は、公園のゴミ箱を漁る。

周りには誰もいない、深夜の2時。

僕はゆっくりと歩みを進めた。

電灯のない公園は、僕にとって最高の舞台。

僕はギラついた目で、男を見下ろした。

相当飢えて衰弱しているのか、後ろに立たれても気付かない。
それならそれでいい。

僕はゆっくりと男へとナイフを振り下ろす。

「ぐあっ！！！」

喉元へと突き立てたそれは、肉を裂いて血管を千切る。

耳慣れない音と共に、振り向いた男の口から、大量の血が吐き出さ

れた。

あの時の女のような美しさはないけれど、迫力がある。

男が僕の方へと手を伸ばすのを払って、もう一度ナイフを突き立てる。

痩せこけた身体は、僕のナイフを簡単に心臓へと招いた。

甘い。

乾いた唇を潤すために舐めれば、男の返り血がじわりと口の中へと広がる。

独特の風味をもつものが、僕の渴きを癒やす。

自然と笑いが込み上げる。

絶命した男が血だまりに倒れ込み、恐怖の表情のまま僕を見上げていた。

ありがとうございます。

僕は男に深く突き刺さった得物を抜くと、その場から立ち去った。その時の僕は、多分不気味なくらい笑っていただろう。

その夜、僕は女の子のいる病院へと母と一緒に出向いた。

昔いろいろあって父は出て行ってしまったけど、母がいればそんな事どうでもよかった。

うちへ帰ってから僕はとにかく泣いて、大事な母を困らせてしまったけれど。

僕はその子にも母にも申し訳なくて本当は行きたくなかった。
だけど母は、そんな僕を半ば引きずるようにして女の子の元へと連れて行った。

「申し訳ありませんでした!!」

母が女の子の両親に深々と頭を下げる。

僕もそれを見て、泣きながら頭を下げた。

いいんです、という言葉にも、顔を上げず。

ただひたすらに謝った。

まるでそれが存在意義のように。

成澤くん。

不意にその名を呼ばれ条件反射で見れば、人差し指にぐるぐると包帯を巻いた女の子がいた。

明らかに短い、その指。

僕は言葉を失った。

身体中が震えに包まれたのだ。

あの指は、僕が切り落とした。

僕が、この手で。

ごくりと唾をのむ。

微塵も恐怖は感じなかった。

あるのは、興奮。

それだけ。

僕は涙の止まった瞳でそれを見つめながら、深く願った。

ああ、もしもこの手にあの鋭く光る包丁が有るのなら。

僕はきつと、彼女の指をすべて切り落としていたのに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1846ba/>

僕の後ろはいつも雨。

2012年1月8日01時53分発行